

はじめに

キムスギョン カンウオン ドンチョンゴン
金壽卿は1918年に江原道通川郡で生まれ、京城帝国大学予科を経て、1937年に同大法文学部哲学科に入学した。1940年の卒業後に、東京帝国大学文学部言語学講座（大学院）に入り、1944年には京城帝大の朝鮮語学研究室の嘱託となった。1945年8月の日本の敗戦はソウルで迎えたが、1946年8月に北朝鮮（1948年9月以降は朝鮮民主主義人民共和国）に渡り、同国の言語学・言語政策において大きな影響力をもった言語学者である。たとえば現在「労働」という単語について、南では“^ノド^ン” (*nodong*)、北では“^ロド^ン” (*rodong*)と表記する。この表記法が北朝鮮で確立される際に理論的根拠を提供したのが、金壽卿が1947年に『労働新聞』に発表した論文であった（巻末文献目録参照）。その他にも数多くの業績を残した金壽卿は、越北（1946年）から、金日成総合大学を去る1968年まで、同国の言語学の中軸を担ったといつてよい存在だった。その後しばらく学界での消息が途絶えるが、1980年代後半から研究活動を再開し、2000年に平壤で亡くなるまで活躍した。

金壽卿の経歴や業績については、これまで一定の研究蓄積があるが、まだ十分に明らかになってはいない。まず1990年代以降、北朝鮮において学説史的な再評価が進められた。1996年の金日成総合大学創立50周年に合わせて、同大朝鮮語文学部が編んだ『主体の朝鮮語研究50年史』は、金壽卿が「審査」（監修に近い意味もあると思われる）を務めているのみならず、同書の各所で金壽卿の業績が学説史的ななかに位置づけられている¹。同年、金日成総合大学の教員にして作家のリ・ギュチュンが、金壽卿を主人公と

¹ 김영환, 권승모 편, 『주체의 조선어연구 50년사』, 김일성종합대학 조선어문학부, 1996.

した『^{サルメ}人生の^{メツブリ}絶頂』というタイトルの小説を刊行した²。2004年には朝鮮語学の雑誌『文化語学習』が「有名な言語学者」シリーズのなかで金壽卿を取り上げた³。これらの叙述は貴重な情報をもたらしたが、そこでとりあげられた金壽卿の個人史・学問史はほんの一部でしかない。一方、南の韓国においては、時おり学説史のなかで触れられることはあったが、本格的な再評価は、^{キムミンス}金敏洙（^{コリョ}高麗大）が代表をつとめる財団法人東崇學術財団が、^{トンスン}2006年に第3回「東崇學術財団が選定した言語学者」として金壽卿を選んだことが契機となった⁴。本書執筆者の1人である^{チュエキョンボン}崔 炅 鳳氏（^{チュ}圓光大）が、その際に金壽卿の業績をまとめ、2009年にはそれをさらに発展させた先駆的な研究を公表した⁵。日本では、京城帝大時代の師であった言語学者の小林英夫が1950年代に回想記を2本発表していたが⁶、その後関心を集めたわけではない。2000年に熊谷明泰が金壽卿の前記『労働新聞』論文を発掘して歴史的に位置づけたが、これがほぼ唯一の貴重な学術的成果であった⁷。

このように金壽卿については東アジア諸国でそれなりの研究蓄積があるとはいえ、その歩みはまだ本格的に解明されてはいない。こうした状況をふまえ、2013年11月9日（土）に、私たちは同志社大学において「北に渡っ

2 리규준, 『장편실화 삶의 메부리』, 금성청년출판사, 1996.

3 “이름난 언어학자 김수경”, 『문화어학습』 2004년 3호.

4 최경봉, “제3회 2006년 東崇學術財團이 선정한 언어학자 金壽卿 (1918-1999)”, 『財團法人 東崇學術財團消息』 제11호, 2007. なお、金敏洙氏は、1946年に京城師範学校附設臨時中等教員養成所で、金壽卿から「朝鮮語学概論」の講義を直接聴いたことがあるという（최경봉 외, “해방 이후 국어 정립을 위한 학술적·정책적 활동 양상: 김민수 구술”, 2007년도 구술자로 수집사업 녹취록, 국사편찬위원회, 2007）。

5 최경봉, “金壽卿의 국어학 연구와 그 의의”, 『한국어학』 45호, 2009.

6 小林英夫, 「教え子」, 『Papyrus (東京工業大学学友会図書館委員会)』 No.1, 1951; 同「白いハト」, 『PHP』 第110号, 1957 (いずれも『小林英夫著作集』 10, みすず書房, 1977に収録)。

7 熊谷明泰, 「南北朝鮮における言語規範乖離の起点: 頭音法則廃棄政策における金壽卿論文の位置」, 『関西大学人権問題研究室紀要』 41, 2000.

た言語学者・^{キムスギョン}金壽卿（1918-2000）の再照明」を開催した⁸。同シンポジウムは金壽卿の生涯と研究について多角度から検討することで、北朝鮮の言語政策・言語理論のみならず、植民地時代および冷戦期における学問や、南北分断状況における家族といった問題まで考えることを目標に掲げた。言語および言語学という側面から北朝鮮を照明することによって、同国に関する冷静な学術研究が求められる現状に新鮮な視点を提供することも目指していた。本書は、このシンポジウムで発表された論文および資料をもとに構成した。

このシンポジウムの企画経緯について、ここで少し説明しておきたい。この企画の発端となったのは、2010年春のある出会いであった。2009年から2010年にかけて、私（板垣）は在外研究で米国に滞在した。その期間中に、ある調査のためにカナダのトロントに行った。その目的は、朝鮮半島北部の出身者にインタビューをすることだった。トロント郊外においてある方のインタビューを終えた後、夕食時に同じくトロント郊外に住んでいた^{キム}金^ヘ恵^{ヨン}英氏がいらっしゃった。カナダでは、配偶者の姓にしたがって Hye-Young Im とのお名前で、トロント大において教鞭をとっておられた。夕食の場が郊外だったので、親切にも帰りに私を車で市内のホテルまで送ってくださった。その車中で、「実は父が北朝鮮で言語学者だった」というお話をしてくださった。ご自身も^{ピョンヤン}平壤で生まれ、朝鮮戦争の時に父と生き別れになってしまった。そして1960年前後に父が北で言語学者として活躍しているという話を知り、その後、カナダに移民をした。1980年代に再会を遂げ、その再会後に金壽卿を主人公にした小説も出版された。短い時間ではあったが、およそそのような話をうかがった。非常に印象的な話だったので、私の頭に深く刻みこまれた。

⁸ 同志社大学人文科学研究所が主催した国際シンポジウム「磁場としての東アジア」シリーズの第3回として開かれ、同志社コリア研究センターおよび同志社大学グローバル地域文化学部が共催した。

ただ、そのときは私自身がまだ北朝鮮の言語学や金壽卿について知識も関心も有しておらず、そのままになっていた。2012年11月、同志社大学の近所の店で、本学教員のコ・ヨンジン氏と話をしているなかで、「金壽卿という言語学者は1940～60年代にかけて、北朝鮮の言語学の基礎を作った人物だ」という話を聞いて、私の記憶が蘇ってきた。「確か、その娘という方にトロントで会った」と言って、ノートパソコンを開き、その時のメールのやりとりを見て、そのことを確認した。その場で、「ぜひ Hye-Young Im さんと呼んで、講演会を開こう」と話が盛り上がった。それが初期の企画内容だった。ちょうどその頃、人文科学研究所で2013年度に東アジアに関する国際シンポジウムを構想しており、この企画をその一環として開催することになった。それをきっかけに話がさらに大きくなり、韓国・中国・東京から研究者を呼ぶ国際シンポジウム企画となったのである。

こうした経緯からして、シンポジウムの中核は、何といたっても金壽卿の実際の娘・金惠英氏（シンポ当時はトロント大）と実際の息子・金泰成氏（シンポ当時は釜山^{プサン}大）による基調講演「父、金壽卿」にある。金壽卿は朝鮮戦争時に家族と離ればなれになったが、1980年代末以降、再会をとげる。シンポジウムでは、その家族離散と再会の経験を中心に語っていただいた。お2人が公の場でこの話を語るのはこれが初めてのことであった。当日は2人で順番に原稿を読み上げたが、会場からすすり泣きが聞こえてくる感動的な講演となった。

シンポジウムでは、こうしたパーソナル・ヒストリーを中心に置きながら、専門の研究者をパネリストとして招き、金壽卿の業績や生涯について学術的・総合的に論じた。

第1部「北朝鮮の言語学・言語政策と金壽卿」では、まず金河秀氏（シンポ当時は延世大）に、その後の専門的な議論に先立つ講演として、北朝鮮の言語政策および言語学史を総論的に論じた。次に崔炅鳳氏（圓光大）が、2009年の論文では論じ尽くせなかった部分を中心に、コリア語研究史のな

かで金壽卿の業績を実証的に意味づけた。

第2部「金壽卿の国際的な照明」では、日本・旧ソ連・中国のそれぞれの観点からの議論を提示する。まず、私（板垣）が、植民地期に遡って金壽卿の朝鮮語学の形成を追い、その延長で解放直後の金壽卿の研究活動をも位置づけた。次にコ・ヨンジン氏は、金壽卿が三国時代の言語史研究について南朝鮮（韓国）の学界を批判した著書（1989年）を、韓国・日本との関係のなかで読み解いた。ソ連の言語学の影響については、既に文法書についての業績をもつ趙義成氏（東京外国語大学）に、あらためてより広いコンテクストから語っていただいた。そして、中国の朝鮮語学の元老研究者である崔義秀氏（青島濱海学院）が、中国朝鮮族の言語学への金壽卿の影響を、文献、ご自身の体験、インタビューなどをもとに論じた。

本書は、このシンポジウムの報告順ほぼそのままに構成してある。ただし、当日は基調講演を総合討論の直前におこなったのに対し、本書では冒頭に入れてある点が異なる。このほか、金日成綜合大学に留学していたときに金壽卿から直接学んだことのある崔應九氏（北京大）より特別寄稿があり、シンポジウム当日に読み上げられた。これも本書に収録した。また、私と金壽卿のご遺族の合作で、可能なかぎり詳細な年譜を作成するとともに、知り得たかぎりにおいて著作目録を整理した。シンポジウムの終了後、さらに加筆訂正を加えた年譜・著作目録を巻末に掲載した。これは現時点で最も正確で詳細な資料であると信じている。

シンポジウム当日は、専門家から一般の方々まで、多様な参加者があった。インターネットでの中継もおこなった。当日の報告集は余裕を見て300部印刷したが、来られなかった方にも渡したいとまとめて持って帰る方がおられたり、お世話になった方々などに後日送ったりしたため、ほぼ在庫切れとなった。関心の高さがうかがえる。

このシンポジウムを活字化するにあたり、まず同志社大学人文科学研究所の紀要『社会科学』44巻1号（2014年）に 코리아 語版を掲載した。同紀要

は同志社大学学術リポジトリ (<http://library.doshisha.ac.jp/ir/>) を通じてインターネットで全文を読むことができる。本書は、この日本語版であり、同志社コリア研究センターのコリア研究叢書2として刊行するとともに、同じく学術リポジトリでも公開する。内容はほぼ『社会科学』掲載論文の日本語訳といってよいが、体裁を整えたり、加筆訂正したりした部分もあるほか、日本の読者向けに訳注を付加したりしている。その意味で本書はそれ自体新たな著書というべきところもある。

本書が成立するまでのあいだに多くの方々のお世話になった。本書の出版費用は、まず匿名の方による寄付に依るところが大きく、この場で最初に感謝を申し上げたい。また、この企画は同志社コリア研究センターと高麗大民族文化研究院の国際共同研究「朝鮮半島と日本を越境する植民地主義および冷戦の文化」(頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム)の一環でもあり、同プログラムの助成金も活用させていただいた。このプログラムのメンバーでもある小川原宏幸氏には、叢書1に続き、原稿の校閲でお世話になった。シンポジウムの開催に際しては、同志社大学人文科学研究所の教職員がさまざまな面で助力してくださった。企画を進める過程では、^{チェユンガブ}崔允甲氏(延辺大)、Ross King 氏(University of British Columbia)、伊藤英人氏(東京外国語大学)らのお世話になった。同志社大学グローバル・スタディーズ研究科博士課程の^{オインジェ}呉仁濟氏は、シンポジウムの準備、本書の準備のいずれにおいても奔走してくれた人物として特記しておきたい。

日本、南北朝鮮、中国など、国境をまたがって足跡を残した金壽卿の歩みを追った本書が、東アジアの相互理解と緊張緩和に多少なりとも寄与できれば幸いである。

編者を代表して

2014年11月

板垣竜太